

柔らかなココロ 「女子を育てる」

今から約5年前、待望の女子が生まれてきてくれた。普段から大学生の女子学生に接する機会が多い私にとって、実はどうしても女の子が欲しかった。だって、20歳そこらの女の子と柔道指導以外でお喋りする時間は中々面白く、これが娘だったら…と思うことが多々あったことも女の子が欲しい理由の一つだった。

男の子しか育てたことのなかった私にとって、女の子の子育ては全く違ってかなり刺激的な毎日を送らせてもらっている。なんと言っても、言葉の使い方が男の子に比べて巧みで思考そのものが生まれた時から違うことに気づかされる。

幼児の柔道指導をしていても、女の子と男の子の反応はかなり違う。男の子が多い教室のポイントはやたらと競争を入れることがなかなか効果的だなと感じている。一方、女の子が多い教室は、やたら小さな声と大きな声を使い分ける事が女子の心をくすぐるのか一回で伝わるポイントだと感じている。あくまで、私の主観でしかないので、全国の指導者（柔道競技だけでなく）に聞いてみるのも面白いデータが取れるのではと密かに期待している。

そして、現在の私はというと、臨月を迎えている。大きなお腹を愛でる毎日で幸せです♡なんて、書けたら良いのですが、3人の子育て真っ只中の母はそんな余裕はなく、4番目の生まれし命がいつ誕生しても良いように、とにかく年度末の仕事をバタバタ片付ける日々を送っている。

4回目の出産ともなると、巷ではベテラン妊婦なんて言われがちだが、毎回、妊娠の体調が違いすぎて戸惑いを隠せない。運よく毎回、母子ともに健康で出産出来ているが、本当に無事この世に命を送れることは奇跡だと思わずにはいられない。私自身現役時代、死に物狂いで稽古していた日々があったことは確か。しかし、出産はその死に物狂いの日々と対比できないほど別格に命がけだと気付かされる。

男の子だろうと女の子だろうと、とにかく元気に生まれてきて欲しいとそんな気持ちだけで誕生を待ちわびたはずなのに、人間は実に欲深く、子どもの未来の為だとあれこれ注文をつけ、前のめりな子育てに、何度もそれで良いのかと自問自答を繰り返す。それでも、子育ては待ったなし。男の子だろうと女の子だろうと関係なしに毎日、子育てに邁進させてもらっている。さてさて、時期も時期なので、ひな人形でも出しますか。



あ、すぐしまうことになるケド。

(近藤優子)